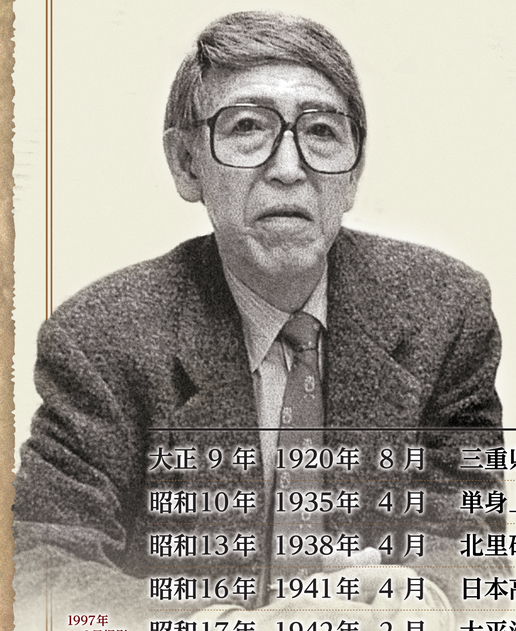

1997年
3月撮影

阪崎 利一博士

さかざき　りいち

略歴

大正 9 年	1920年	8 月	三重県四日市市に生まれる
昭和10年	1935年	4 月	単身上京、日本高等獣医学校獣医学部 入学
昭和13年	1938年	4 月	北里研究所に就職
昭和16年	1941年	4 月	日本高等獣医学校獣医学部　卒業
昭和17年	1942年	2 月	太平洋戦争応召、京都軽重兵連隊に入隊
		5 月	陸軍獣医学校　入学
		11月	原隊復帰
昭和18年	1943年	12月	動員令により出動
昭和19年	1944年	5 月	ビルマ上陸
昭和20年	1945年	8 月	終戦、アーロン収容所に慮囚生活
昭和22年	1947年	7 月	復員（1947年7月24日 宇品入港）
		11月	三重県技術吏員（四日市細菌研究所）
昭和23年	1948年	9 月	結婚
昭和25年	1950年	5 月	株式会社中村滝製薬公衆衛生研究所　所員
昭和28年	1953年	9 月	農林省家畜衛生試験場　研究員
昭和33年	1958年	2 月	獣医学博士
昭和34年	1959年	3 月	国立予防衛生研究所　所員（現国立感染症研究所）
昭和40年	1965年	1 月	「1964年度朝日文化賞」受賞（腸炎ビブリオの発見と研究）
昭和49年	1974年	6 月	「デンマーク王立獣医農業大学 名誉獣医科学博士」称号授与
			獣医学創始200年記念（病原性ビブリオ及び大腸菌の研究）
昭和60年	1985年		東海大学医学部　客員教授
平成 2 年	1990年		財団法人日本生物化学研究所　非常勤主任研究員
平成 6 年	1994年	9 月	Bergey’s Award（Bergey’s Manual Trust）受賞
平成10年	1998年	11月	第42回野口英世記念医学賞受賞
			（腸管病原菌と日和見病原菌の研究）
平成14年	2002年	1 月	永眠（享年81歳）

論文実績

※ 情報元：国立情報学研究所 (NII)
※ 法人・組織などは当時の呼称

熱性患者より分離せる Salmonella simsbury とくに本菌と Salmonella senftenberg との関係（1950）
梅毒血清診断法中カーン推定法と同標準法及村田法との比較成績（1951）
三重縣北部地方における Salmonella の分布：第 1 報 健康者 26, 321 名の検便成績（1951）
三重縣北部地方に於ける Salmonella の分布：第 V 報 綜合成績（1951）
Salmonella 抗原構造の変異に関する研究: I. S. mikawashimaとS. bareillyの相互関係A. S. mikawashimaについて（1951）
Salmonella ballerup類似菌による食物中毒（1951）
食物中毒例より Salmonella moscow の分離（1951）
牛より Salmonella schleisheim 第 2 相菌の分離（1951）
保存菌株 Salmonella newington が Salmonella-anatum に自然変異した 1 例（1951）
斃死モルモットより Salmonella amersfoort の分離例（1952）
SS 培地に関する研究 (変法 SS 培地) II（1953）
腸内細菌学講座 -1-（1954）
Paracolon に関する研究：I. 検索方法と分布状況について（1954）
Paracolon に関する研究：III. Ballerup Paracolon について（1954）
Paracolon に関する研究：IV とくに Bethesda-Ballerup 菌属の病原性について（1954）
SYS 寒天 (私共の考案した 1 固形培地) について（1955）
Paracolonに関する研究: VI. 分類不明のParacolon 及び Bethesda-Ballerup 菌属の分類学上の位置についての考察（1955）
東京都の犬の Salmonella 検索成績（1954 年の成績 ）（1955）
牛胆汁中の Salmonella について（1955）
Salmonella 増菌培地の比較試験（1955）
BACTERIUM VISCOSUM EQUI (SHIGELLA EQUIRULIS) の分類学上の位置について（1956）
獣医学領域における病原腸内細菌（1957）
Salmonella O 抗原をもつ Citrobacter (Escherichia freundii) について（1957）
14. 1957 年度に分離された Salmonella について (第 45 回日本獣医学会記事)（1958）
Proteae に関する研究：II. Proteus の血清学的性状について（1958）
腸内細菌類似のグラム陰性桿菌とくに Bacterium anitratum,
　Pseudomonas aeruginosa, Achromobacter, Alcaligenes faecalis などの同定法（1958）
腸内細菌同定のための簡易な生化学的およびアミノ酸脱炭酸検査法（1959）
Proteae に関する研究：III 健康人獣における Proteus の検出率（1959）
Proteae に関する研究：V 分離 Proteus の血清学的型別（1959）
Proteae に関する研究：IV Proteus の形態学上 , 培養上および生化学的性状について（1959）
Proteae に関する研究：VI. Proteus の病原性について（1960）
動物由来の Escherichia の病原性に関する研究：
　第 1 編 ウマの産科領域から検出された Escherichia の生化学的 , 血清学的性状および毒性（1960）
蛇から分離された 8 種の ARIZONA 新型菌とその新鞭毛抗原（1961）
Aeromonas を分離した急性下痢症の 2 例（1962）
新らしいジフテリア菌分離培地 -HB 培地 - の研究（1963）
腸内細菌の病因論（1962）
わが国におけるサルモネラ疫学の特性（1962）
病原性好塩菌（1963）
日本における Salmonelleae の疫学と生態［英文］(1964)
サルモネラ症 (人獣伝染病 (シンポジウム))（1965）
腸炎ビブリオの細菌学 (腸炎ビブリオ (シンポジウム))（1965）
腸炎ビブリオの検査方法（1966）
腸炎ビブリオの溶血能に関する研究：要望課題 12 腸炎ビブリオの諸問題：食中毒（1967）
Gram 陰性桿菌の長期化学療法患者喀痰よりの分離にかんする研究（1969）
細菌分類学入門（1974）
Bergey のマニュアル（1976）
細菌検査の自動化（1977）
リファレンスシステム -- とくに外国におけるそれの紹介
　（わが国における Reference Center の現状と将来 < シンポジウム >）(1978)
下痢と検査（1978）
司会のことば (下痢 , 腸炎をめぐって < 第 23 回日本臨床病理学会関東・甲信越支部例会特集 >）(1978)
細菌性下痢の発症機序 (下痢 , 腸炎をめぐって < 第 23 回日本臨床病理学会関東・甲信越支部例会特集 >）(1978)
新しい菌の生化学テスト用培地とキット (微生物検査に関する新しい問題点 < 特集 >）(1979)
下痢 -- 腸炎と腸内菌叢 (腸内細菌叢の基礎と臨床 < 特集 >）-- (諸病態における腸内細菌叢の変動)（1978）
海外旅行者と無関係に突発するコレラ (コレラの臨床 < 特集 >）-- (最近のコレラ流行の疫学)（1979）
新しく登場した病原菌 ,Campylobacter fetus subsp.jejuni
　および Legionella pneumophila の分離と同定 (新しい抗生物質療法 < 特集 >）-- (トピックス)（1979）
感染症の早期診断 (最近の感染症 < 特集 >）(1981)
腸炎ビブリオ菌体由来溶血性画分 (ITHF) の組成脂肪酸と溶血活性について［英文］(1982)
細菌の命名に関する国際委員会と国際的に承認される細菌名（1982）
Non-O1 Vibrio cholerae の分布 (1976-1981) およびその毒素産生性について（1982）
臨床細菌検査の自動化および機械化
　（第 55 回日本細菌学会総会シンポジウム ）-- (臨床細菌検査の自動化および機械化 (シンポジウム 4))（1983）
病原細菌同定の問題点 (第 5 回衛生微生物技術協議会議会研究会)（1984）
細菌性食中毒の現状 -- 混乱する食中毒の定義（1987）
サルモネラ腸炎集団発生事例における疫学マーカーとしてのプラスミドプロファイルの評価（1988）
菌の同定：菌種の決定から型別まで（1988）
O157：H7 腸管出血性大腸菌感染モデルにおける Clostridium butyricum を用いた感染防御の検討（1998）
疫学調査マーカー：血清型と生物型（1989）
炭素源利用テストによる Enterobacter cloacae の生物型別（1989）
院内感染防止対策に必要な細菌学 (3): 細菌遺伝学と疫学マーカー：その 1（1989）
臨床材料由来 Acinetobacter 属菌株の同定（1990）
メチシリン耐性 Staphylococcus aureus (MRSA) 感染症対策の疫学マーカーとしての抗菌剤耐性パターンによる型別（1992）
雑草の唄（1995）
CPS ID 2 寒天培地 (bioMerieux) の評価：尿検体の迅速診断（1995）
新しい病原菌（1995）
新しい Salmonella の分離培地 SMID 寒天 (bioMerieux) の評価（1995）
発色 (光) 酵素基質の臨床微生物学への応用（1997）
Helicobacter pylori 感染マウスの材料からの免疫磁気ビーズ法による菌の検出（1998）
それでも Salmonella choleraesuis は使用されない（1999）
　…その他、多数実績あり。

「PRODUCTION OF CHOLERA-LIKE ENTEROTOXIN BY AEROMONAS HYDROPHILA」
Japanese Journal of Medical Science and Biology 37(3), 141-144, 1984
National Institute of Infectious Diseases, Japanese Journal of Infectious Diseases Editorial Committee

国立予防衛生研究所細菌部	島田 俊雄
国立予防衛生研究所細菌部	坂崎 利一
日水製薬株式会社中央研究所	堀米 一己
日水製薬株式会社中央研究所	上坂 良彦
日水製薬株式会社中央研究所	庭野 清司

「A NEW SELECTIVE, DIFFERENTIAL AGAR MEDIUM FOR ISOLATION OF VIBRIO CHOLERAE O1: PMT (POLYMYXIN-MANNOSE-TELLURITE) AGAR」
Japanese Journal of Medical Science and Biology 43(2), 37-41, 1990
National Institute of Infectious Diseases, Japanese Journal of Infectious Diseases Editorial Committee

国立予防衛生研究所細菌部	島田 俊雄
東海大学医学部微生物学教室	坂崎 利一
日水製薬株式会社中央研究所	藤村 重晴
日水製薬株式会社中央研究所	庭野 清司
日水製薬株式会社中央研究所	三品 正俊
日水製薬株式会社中央研究所	滝沢 金次郎

書籍関連

腸内細菌検索法（1956年）1956
腸内細菌とその類似菌の簡易なしらべかた（1962 年）(栄研学術叢書（第 1 集）） 1962
腸内細菌同定法（1964年）1964
Schaub: 臨床細菌検査の実際（1964年）1964
医学細菌同定の手びき（1967年）1967
微生物学ポケット事典（1970年）(ニッサン・ライブラリー〈no.4〉) 1970
家畜微生物学（1970年）1970
微生物検査の手びき（1971年）1971
医学細菌同定の手びき（1974年）1974
腸内細菌〈1〉概論（1975年）1975/1
腸内細菌〈2〉各論（1975年）1975/5
細菌・真菌・原虫用培地「ニッスイ」マニュアル（1975年）1975
家畜微生物学（1977年）1977/4
家畜微生物学　1977/4
腸内細菌 3 各論 2　1977/4
新細菌培地学講座〈上〉(1978年) 1978/1
新細菌培地学講座〈下〉(1978年) 1978/5
腸内細菌 4 各論 3 1979/6
サルモネラ症―その細菌学, 病理学および臨床（1979年）1979/7
臨床と治療のための医学微生物学（1981年）1981/9
食中毒 (1)　1981/1
細菌・真菌・原虫用培地「ニッスイ」マニュアル（1982年）1982/7
腸内細菌 1 概論 1983/5
腸内細菌（2 各論1) 1985/1
食中毒 (2) 1983/1
グラム陰性菌の同定 < 除・腸内細菌 >（1985年）1985/7
新 細菌培地学講座〈上〉1986/11
新 細菌培地学講座〈下1 〉1988/8
食水系感染症と細菌性食中毒　1991/7
概論、Salmonella 属（腸内細菌）1992/5
腸内細菌〈下巻〉1992/6
医学細菌同定の手びき　1993/11
図解臨床細菌検査　1996/3
花咲く雑草の記―ある細菌学研究者の昭和史　1997/5
臨床材料にみられる腸内細菌以外のグラム陰性、好気性および通性嫌気性桿菌の同定　2000/1
新訂 食水系感染症と細菌性食中毒　2000/9
アメリカ微生物学会臨床微生物学ポケットガイド―メディカルスタッフのための臨床微生物検査ガイド　2000/10
臨床医のための臨床微生物学　2002/6
　…その他、多数実績あり。

学会関連の名誉会員

平成 3 年	1991 年 11 月	日本食品微生物学会	名誉会員（第 6 号）
平成 5 年	1993 年 3 月	日本細菌検査学会	名誉会員（第107号）
平成 9 年	1997 年 1 月	日本臨床微生物学会	名誉会員（第 13 号）

阪崎利一博士の偉大なるご功績を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。

SHIMADZU Excellence in Science　島津ダイアグノスティクス 株式会社

© 2023 Riichi Sakazaki, Shimadzu Diagnostics Corporation.